

# このコラムの緒としての「考

## ——天と地の融和するふるさと&その復権

一般社団法人 洗楓座  
一般社団法人 e f c o . j p  
代表理事 佐藤 建吉

別な「空間」でもある。

戻っている存在もある。

### ▼大都市人口集中

の時間的な余裕を創り出したいが、これは持続可能な地方再生につながる方法ではないだろうか。

### ▼ふるさと再考&復権

冒頭に、「空間」に触れたが、空間は天と地の間の場である。それは高く広い場である。遠くから故郷を見つめてきた。天と地には隙間はなく一点に見える。「ふるさと」は遠くへ思うものといわれるように、もはや天と地は一体視され、同時に愛着もあり、大切な場所となる。

「ふるさと」を切り捨てるのではなく、新しい視点で、ふるさとの象徴である地方を復権させたいものである。

土地があり自然がある地方のもつ資源を活かす方法には、本紙の主題である自然エネルギーの利用、すなわち再生可能エネルギー利用がある。地方こそがその適地であり、目標とし取り組み、実践するSDGsの重要な対象先である。ソリューションでもあった。

### [Society]

「持続可能な開発目標」で、2015年9月の国連サミットで採択された先進国・途上国問わず2030年を年限に達成すべき国際目標で、貧困や教育、エネルギー、都市、気候変動など17項目を掲げ、169のターゲットで具体化されている。日本の計画では、技術革新による未来社会の推進、地方創生・循環型社会の推進、次世代人材の育成や女性活躍の強化を柱としている。

### ▼大都市人口集中

ふるさと再生がテーマ本コラムのテーマであるが、その場合二つのふるさとを「地方」と呼んでもいい。東京を中心とする首都圏には、2018年の統計で、3544万人が住んでいるという。関西圏には1708万人。ついで中京圏には1111万人であるという。以上の三大都市圏には、6453万人が住み、総人口の51.5%に当たる。これ以外の地方圏では、6000万人であるという。

日本の人口は、東京中心の首都圏へ一辺倒に集中し、マンシヨン暮らしが主流となっている。結果、大都市圏に誕生して生活している人も多くなっている。したがって、首都圏の街が「ふるさと」の人も増えている。

### ▼NEWS

ふるさとSomething NEWSのNEWSは、方位のN(北)E(東)W(西)S(南)を綴って意味づけしている。首都圏は、文字通り政治や経済、その他あらゆる局面の中心となり発信している。どっしりも、首都圏中心の空気が大局となっている。そこで、本コラムでは、日本や世界の東西南北からの地方再生への有意な話題を提供したい。

多様性の時代、さらにICTとAIが進行する現代社会において、それを受容する側面とその過度な増加を緩和して、真の多様性をつくり出す余裕や解決策を定めることも必要となる。そこ

### ▼共通する「間」

いつの間にか2019年になつた。しかもすでに1月28日。単純な物理学では、時間は、それぞれの人間に、公平にやってくる。来て通過する。実は、人間は時間に乗じていると思えるが、

「間」は「時間」と「人間」に触れたい。両者には「間」が含まれている。これらは中国語に派生した日本語であるが、中国語のそれらにはその共通性はない。どうやら、日本人の感覚に由来するものといえる。それぞれ「時の間」、「人の間」であり、それは、文字通り、「時と時の間」、「人と人の間」である。

「ふるさとSomething」は、ふるさとsomethingを付けている。では、その対象は何であろうか？

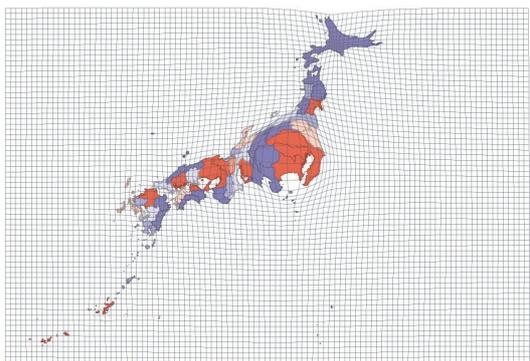
### ▼ふるさとSomething

本コラムは、ふるさとsomethingを付けている。では、その対象は何であろうか？

「時間」とは、例えば2019年は、1月1日から12月31日までの時の流れを意味する。では人間の意味は？私という人はほかの人という違う人との間に存在であり、私一人を消しても人との関係は残る。それこそが、一人でなく共に生きる「人間」という言葉の所以である。私たちは、それぞれが今日の時や時間を背負っており、それが暮らしとなり、社会となる。そして、人間の暮らしの場としての空間がある。

この「空間」にも「間」がある。私が、生まれた時、私が生まれた地、そこには「人」が居た。つまり、生まれた時には、すでに、「人間」がいて、「空間」があった。同時に、「時間」が始まった。そして、人生が始まったが、その地に愛着や思い出ができる「故郷」となる。それは、特

人口集中をカルトグラムで図示するとすると分かりやすい



最初の「捨たざるや」は、厳しい現実の意味合いがある。中学や高校を卒業して、都会に出た人が抱くふるさとであり、第二のふるさとが「郷土」になってしまった。中学や高校までのふるさととは、確かに思い出の中にはあるが、残念ながら愛着の程度は弱くなっている。

第二の「郷土のふるさと」は、その通り、愛着と思い出のある地としてのふるさとである。それは、いま住んでいないが、熱い想いがあり、「故郷」というに等しい感情がある。こ

こつた、ふるさとの話題もsomethingなる。